

あとがき

当画廊の現代人物肖像画展も今回で7回目を迎える。例によって、この1年間に私の目にとまった作品を私の好みで選び展示している。展示作品は36点、作家は23名に及ぶ。作家名を生年順に並べると次のとおりである。H.マチス(5), P.クレー(1), P.ピカソ(1), J.コクトー(1), M.シャガール(1), J.ミロ(3), P.デルボア(1), H.ムーア(1), A.ジャコメッティ(2), 海老原喜之介(1), H.エルニ(1), 瑛九(1), 阿部展也(1), 駒井哲郎(1), R.ハミルトン(3), 池田満寿夫(1), 木村光佑(1), B.マックレーン(1), T.フィンク(3), 彦一彦(1), M.ノイマン(2), 山本容子(1), J.-C.ブレ(2)。(注, カッコ内の数字は点数), 手法別にみると版画24点, ドローイング(コラージュ, レイヨグラムを含む)9点, 油彩3点となる。

H.マチスの点数が多いのは私のマチスへの愛好の度合の大きいことを示している。またM.ノイマンの油彩の大作2点が目につくが, ノイマンにはこの1月25日, ベルリンで初めて逢い, 翌日彼のアトリエを訪問する機会を得た。大きい作品はその時求めたものである。ノイマンの作品は私を刺激するエネルギーに満ちている。私をシビレさせる何かをもっている。いずれ近いうちに彼の展覧会を当画廊で開催したいと思っている。

さて, この機会に, 過ぎし1年の実績とこれからの1年間のスケジュールを別表にとり

まとめたのでご覧いただきたい。

昭和59年を振り返ってみると, それぞれの展覧会にそれぞれの思い出があり, コメントをつけたい気持であるが省略し, ここではクリストに絞って一言つけ加えておきたい。

昨年4月のクリスト展はクリスト夫妻を招いてポン・ヌフ・ラップド展を開催したが, クリスト夫妻の10日間の滞在で私のクリストに対する理解は一層深まった。作品の展示のやり方, 講演会やインタビューでの態度, ポスターをサインするときの2人の協力振り等々クリスト夫妻が彼等のプロジェクトを進めていく上でのエネルギーの根源をかい間みたのである。

その後6月, パリ・東京現代美術交流展で, 山田正亮展がパリのドニーズ・ルネ画廊で開催されるのを機に, パリ, バーゼル, ベルリン, ロンドンと2週間ばかり旅行した。丁度その頃, バーゼルのアーキテクチャー美術館で, その美術館の床を布で包むクリストの展覧会が開催されたが, その初日の前夜にクリスト夫妻の誕生パーティが催され女房とともに出席した。驚くべき符合というべきであるが, クリスト夫妻はともに1935年6月13日生まれなのである。(夫人のジャンヌ=クロードが私に2人のパスポートをみせてくれ私は確認した。)そこでジャンヌ=クロードのご両親に初めて逢った。父上はフランス陸軍の将軍でド・ゴール将軍に似た立派な体格の紳士であり, 母上は小柄の可

愛らしい老婦人であった。クリストはブルガリアから亡命してパリに着いてしばらくの間は生計をたてるため似顔絵を画いて暮らした。たまたま、ジャンヌ=クロードのお母さんの似顔絵を画いた縁で、クリストは娘のジャンヌ=クロードを知り、2人は結ばれたという。ご存知のようにクリストのドローイングの筆力の冴えは素晴らしいものであるから、きっとその肖像画は魅力的なものであったろうと想像する。パーティでは多くの人が当画廊のクリスト展のカタログが立派だとほめられたのは幾分の外交辞令はあるのは承知のうえでもうれしいことであった。

ところでさる1月13日付の私に届いたジャンヌ=クロードの手紙によるといよいよポンヌフのプロジェクトがこの9月21日、22日、23日に実現されることになるという。この2月にはパリから70km離れたところの2つのアーチのある橋で、実際にラッピングのテストをやりと手紙には書いてあった。これが本当に実現すると、ひとつの事件である。マイアミのサラウンデッド・アイランドやカリフォルニアのランニングフェンスが大自然のなかでのプロジェクトであるのに対し、ポンヌフの仕事はパリという古いヨーロッパの大都市でのプロジェクトである点で前者と質的に異なる。多くの困難をのりこえて一つの歴史的な仕事に立ち向って行くクリストを思うと興奮を禁じ得ない。ポンヌフ周辺の風景は新たな風景に変貌するであろう。これはまずこの目でみておきたいものである。何としてもうまく成功するよう祈っている。

今年(昭和60年)の企画展であるが、一覧表のとおりビッシリとつまってしまっている。これもそれぞれコメントをつけたいところであるが割愛し、2つの展覧会のことについて申し述べておきたい。

5月のH.ムーア彫刻展は一昨年準備をしていたが都合で延期となり、今回実現の運びとなったものである。母子像(1983)1点を中心に小品10点(1982~84)を展示の計画である。ムーアの彫刻展もだんだんと開催することがむつかしくなりつつある状況になってきている。ラブリーな彫刻がならぶこの展覧会は楽しみである。

恒例の7月のオマージュ瀧口修造展(第5回)は瀧口修造先生御自身の作品を展示することで準備中である。この企画をたてた理由は、若い人々の間に、瀧口先生の作品をみたいという要望が強いこと、また今年の7月1日は先生の7回忌に当ることによるものである。デカルコマニー、水彩、ドローイング等60~70点は展示したいと考えている。先生の詩集、評論集は出版されているが、画集は一冊もない。この機会にカタログを作成し、画家としての瀧口修造の側面に光を当てたいと考えている。関係者のご協力をお願いしたい。

ところで、思いがけないハプニングをひとつ。この1月下旬、所用でパリ、ベルリンに小旅行を試みた。パリからベルリンへ向う途中、デュッセルドルフに寄航したが、そのデュッセルドルフから私の隣(空席)の隣(窓側)に座った人物がいささか雰囲気か

違うのに気付いた。フェルトの帽子をかぶり、アルミのカバンを持っている初老の男性である。私は一瞬、彼だナと感じた。間違いあるまいと思った。様子をつかがっていると熱心に本を読んでいる。時々鉛筆でアンダーラインを引いている。機内食にはワインが添えてあり、私は赤ワインを楽しみながら隣の人物を時々そつとうかがっていたが、彼はワインには手もつけず、果物にすこし手をつけた程度で本からついに目を離さなかった。

いよいよ窓外に雪景色のベルリンがみえた時、私は思い切って、あなたはヨゼフ・ボイスさんではないですか？と尋ねた。すると案の定、そうだ、と言う。昨春、東京の西武美術館でのあなたの展覧会のオープニング・パーティであなたをおみかけした。私は東京で現代美術の画廊をやっており、あなたに大変興味を持っている者である。あなたにここで逢えて大変うれしい、とタドタドしい英語で話したのである。別れるとき、われわれは握手をしたが、その時のボイスのすばらしい笑顔は今なお忘れられない。1985年1月25日のことである。

帰国してから若い友人にその話をしたら、随分とうらやましがられ、あなたはツイているという。どうして？ときくと、だいたい、ボイスには逢おうと思っても簡単に逢えない、そのうえ神様と握手したのだから、という。なるほど、ボイスは現代美術の神様か？あのカリスマ性は神様のだナ。ツイてる、というけど、何がついているのかよく分からんからなあ。……それにしてもボ

イスは勉強家だということが分かった。他人を意識していないボイスの素顔をみたのは思わざる収穫だったなあと思わずひとりごちたものである。難解にして神秘主義的なボイスが私にはさらに幾分親しいものになりそうだ。不思議な出逢いであった。

さき頃、DKMマネジメント・レポート'85/1号(第一勧銀経営センター刊行)に現代美術について寄稿を求められ、「絵をみて火花が散ったとき——現代美術への招待——」なる一文を書いた。最近忙しさにかまけて不勉強で、このエッセイも従来触れたところのくりかえしみたいなところもあるが、私としてはひとわたり言いたいこと、言っておきたいことをストレイトに述べた積りである。別刷で小パンフレットとしたのでご感想、ご意見等あればおきかせいただきたいと願っている。

最後に私の長男の周吾(昭和33年生まれ、慶応義塾大学法学部卒)が昨年9月末、2年半勤めていた信越化学工業(株)を円満退社し、私の画廊の経営に参画してくれることになったことを申し添える。何分、若輩、未熟であり、皆様の厳しいご指導ご鞭撻を抑がねばならない。私同様よろしく願い申し上げます。

1985年3月11日

佐谷画廊 佐谷和彦